

花は秘す

大友一夫

◆おおとも・かずお、医師、大友内科医院院長、埼玉県秩父市。

佐渡から帰ると、本随筆の締め切りが明日に迫っていることに気づいた。今回は取り急ぎ、公器たる雑誌に個人的な旅のメモを記すことをお許し願いたい。

佐渡は訪れたことのない数少ない土地の一つであった。わたしの旅は、学生時代の山といで湯の旅に始まる。全国の温泉を涉猟してもう400カ所近くになるであろうか。途中から風景写真撮影も加わり、このところ花も追っかけている。今回は佐渡島北端の大野亀のトビシマカンゾウを撮影したいと思って宿を探した。佐渡には温泉もあるが、このところ宿のもてなしに関心があり、それならばと雑誌『自遊人』の推薦する宿がよからうと、旅館Hを選んだ。Hは温泉宿ではない。受話器に出た女性の声が何とも優雅で、応対でも優しさが伝わって来る。ここに決めた。

この日、関東甲信越地方は雨で、新潟だけが晴れであった。カーフェリーが両津港に着くと、一路車を駆って大野亀に向かう。トビシマカンゾウは咲き始めたばかりだった。今年の桜の開花は1週間から10日早かったので、ここもいつものシーズンより早めに訪ねたのだった。それでも店の人に聞くと、一昨年と昨年は花の状態が良くなかったので、今年は楽しみだと語っていた。濃紺の海面を背景に、鮮やかな黄色が映える。トビシマカンゾウはニッコウキスゲに似ているユリ科のノカンゾウで、マメ科の漢方のカンゾウとは全く違う。同じカンゾウだが、萱草と甘草だから、当たり前のことなのだ。そんなことに初めて気づいて苦笑した。最近は無知が無恥になっている。

その後、西海岸の一本道をひたすら南下する。海岸沿いに、田植えを終えたばかりの棚田が散在している。佐渡米も最近の評判が良い。旅館Hは花の木由来の名前で、古民家再生の母屋はさなが

ら草莽の庵で、部屋からは一面に広がるたんぼが眺められる。近くには世界的太鼓集団『鼓童』の村がある。あの太鼓の名調子は、こんな村が育んでいたのだ。20年近く前の大晦日、五反田で『鼓童』とジャズピアニスト山下洋輔の協同演奏を聞いたことがある。緩急を織り混ぜた見事な演目の最後に登場したのが「屋台囃子」であった。これは秩父屋台囃子である。幼少の時から聞き慣れた屋台囃子は、フィナーレを飾るに相応しいリズムであり、世界に通用することを知って、身の震えた覚えがある。爾來『鼓童』には注目し続けて来た。一度、玉三郎がここを訪ねたことがある。肉体的にはどうしても男に敵わないジレンマを感じていた女子部員に、玉三郎は女ならではの動きを伝授していた。異分野の一流同士の出会いは、互いの玉を磨き上げることになる。あの官能的ともいえる奏者のパチ捌きと激しい太鼓の音の中にある静寂さにも増して、何と静かな出会いであったことだろう。

翌朝、女将さんと言葉を交わした。電話の声で想像していたとおりの風情があった。『鼓童』の関係者も時々立ち寄られるのでしょうと尋ねると、その通りで、『鼓童』のメンバーの一人はここで居候しているという。玉三郎も何度か食事に見えたそうである。ご主人は陶芸作家で、秋篠宮ご夫妻が工房を訪れたときの写真が飾られていた。この宿にはたおやかな波動が共鳴しあっている空間があるのだ。

佐渡は配流の地でもある。順徳上皇、日蓮上人、世阿弥などが流されている。その日は佐渡歴史伝承館に先ず足を運んだ。ビデオもカメラもご自由にお撮り下さいと説明を受けたのには驚いた。佐渡ならではの大きさか、こんなところは初めてである。時代に翻弄された流罪人の人形が動きながらその身の上を語る。しかし怨念めいたものが感じられないのは、土地の人達が温かく彼らを迎え入れたためだろう。ちなみにわたしは、一つの島に罪人ばかりが配流されたとしても、その子孫は、どこよりも善良な島民となるであろうと思っている。世阿弥のコーナーには、北村西望の彫塑「世阿弥観音」が飾られていた。西望は好きで、わが家の床の間には桃を手にした老人のレブリカ「富貴」が鎮座している。「世阿弥観音」は西望最後の作で、いまだ衰えない力強さの中に、品格が漂っている。能面の奥に、時代を貫く

透徹した眼差しと芸術家の昇華した魂を感じる。最晩年に世阿弥を選んだことが、そこはかとなく分かる作品である。これも一流同士の出会いである。

今回の旅の収穫の一つが、鑄金の人間国宝佐々木象堂の作品に出会えたことである。この伝承館に併設されている佐々木象堂記念館に足を踏み入れたときであった。皇居新宮殿の棟飾り「瑞鳥」を目にして息を呑んだ。何という大らかさ、モダンであって伝統を逸脱していない。伸びやかな曲線は虚空を自在に飛び回る。それでいて静謐そのもの。象堂なる作家がいたことを知らなかった。目立たなくてもこんなに立派な花が咲き続けていたのである。女房がこの瑞鳥に触っているのを見て、作品に触れてはまずいじゃないかと思ったら、これに触れると幸運が訪れるという説明を目ざとく発見していたのだ。

心地よい感興を残して伝承館を出ると、一人の初老の男性が「車で2、3分の所に真野御陵があるよ」と教えてくれた。最初タクシーの勧誘かと思ったら、そうではない。何故わたしたちに教えてくれたのかも分からない。わたしたちが自家用車で来ていることさえ知らないはずだ。真野御陵は順徳上皇の眠っている墓所である。承久の変（1221）で、後鳥羽上皇（隠岐へ）、土御門上皇（土佐へ）とともに佐渡へ配流された天皇であり、この土地で王子、皇女も儲けている。わたしたちは早速そこを訪れて参拝した。何とも清々しい気分になり、そこを後にした。あの初老の男性は順徳上皇の使いの人だと理解した。

次いで長谷寺を訪ねた。牡丹で有名な所なのでもしやと思ったが、案の定黄色い牡丹以外は咲き終わっていた。わたしの畑と同様、佐渡のジャガイモも花を付けていたので、気候は不思議なほど秩父と似ている。長谷寺の三本杉は、樹齢千年以上、目通の周囲はどれも6m以上あり、樹勢は衰えていない。世阿弥も島に入って間もなくここに立ち寄っている。古謡曲集『金鳥書』に、「山路を下れば長谷と申して観音の霊地にわたらせ給ふ。故郷にも聞こえし名佛にてわたらせ給へば、ねんごろに拝礼して……」とある。妙な因縁で、わたしも国立東静岡病院勤務時代、伊豆多賀の長谷観音寺で世話になったことがある。

今回、女房は既に読了していた瀬戸内寂聴の『秘花』を携行したが、読み終えないまま帰途に

就いた。小説でない『世阿弥』（人物叢書）も積ん読しているの、いずれ目を通したいと思っている。

わずかに花を開かせて、満開の状況を彷彿とさせたトビシマカンゾウ。慎ましやかなほほ笑みを湛える女将。無私を演ずる芸道。虚空と一体になる匠の技。「秘すれば花」の本当の意味は分からない。いずれ本物は静謐な中においてほとんど目立たない。

帰宅して、遠方の嫁から朗報を得た。ちょうど女房が瑞鳥に触れているころの出来事だったという。今は語るまい。「秘すれば花」である。